
黒箱配達人

浜田色

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒箱配達人

【Nコード】

N3571P

【作者名】

浜田色

【あらすじ】

黒箱を届ける配達人と、送る人、受け取る人の話。

黒箱配達人（前書き）

全部で5話の予定です。

黒箱配達人

高志は、とても貧乏だった。

今日も、実家からの仕送りを待っている。時計を見つめ、今か今かとインターホンの鳴る音を聞き漏らさないよう、テレビもつけないでいるのだった。

ただ、電気代の節約なのだが。

「きたあ。」

高志の細く痩せた指がドアノブに手をかけると、いつもとは少し違った制服をきた配達人が箱をもって立っていた。

「林高志さんですね。お届け者です。」

「待つてましたっ。」

玄関に用意していた印鑑を、受取書に押す。

「ご苦労様です。」

笑顔で箱を受け取ると、その空気のような軽さに首をかしげた。

「あの、すいません。」

「なんか、荷物おかしいですか。」と、立ち去ろうとしていた配達人が、面倒臭そうに戻ってきた。

「これ、実家からだと思うんですけど。中身、すごく軽くて。いつも米とか入ってるんです。」

「米？」

「ああっ。ほら、これ宛名がない。間違った人の荷物じゃないですかねえ。確認してもらえますか。」

配達人の眉間に皺が入った。

「お客さん。」

とんとん。と、箱を指差す。

「箱、見てくださいよ。」

「いや、そりゃあ、いつもより箱が立派って言うか・・・っていうか黒いですけど。実家以外こんな大きな荷物は送ってこないから。」

同じように、配達人も首をかしげた。

「お客さん。あなた、もしかして貰った事が無いんですか。これ。」

「どういことですか。」

「へええ。珍しいこつちや。」

まるで珍獣でも見るかのような顔つきで、高志は見られている。

「とにかく、これは僕に送られたものでは無いと思います。持つて帰ってください。」

「それは、困ります。」

配達人が、力いっぱい箱を押し当てた。

「これは貴方に送られた呪いですから。」

「のろい・・・って。」

「一応いつときますけど動きの遅いことではありませんよ。文字通り『呪い』です。貴方は誰かに呪われたんです。なんか、恨みでも買わはったんと違いますか。」

途端に、黒い箱が重くなった気がした。

「では、他にも届けないといけない家がありますので。」という配達人を、高志は必死に自宅に引き込んだ。

「お・・・お願いします。説明してください。」

「そんな、困ります。実家のお母さんに聞かはったらよろしいやん。」

「でも。呪いをもらったなんて、親にどう言ったらいいんですか。」

「ふつーの事です。よ。アンタが可笑しいんや。大学生くらいの年になれば、一つや二つは受け取ったことはあるし。俺やって、アンタぐらいの歳のころには十個は貰ってたし。」

「じゅ・・・十個。」

「自分で言うのも恥ずかしいけど、モテてん。俺。」

「この箱はどう処分すればいいんですか。」

「燃えるごみにも出したらいいんです。あ、この地区やったら

資源ごみかなあ。」

「お被いとか、いらないですよね。」

「呪い、っていうてもホンマに呪われる訳とちやいますから大丈夫とちやいますか。でも、あとで死んでも文句とか裁判で訴えたりしたかて会社は責任を負いませんからね・・・って、ちよっと、アンタなあ俺の事をひき止めたいんやったら茶でもだしたらどないやねん。」

高志はあわてて埃が被っていたが上等な煎茶の入った缶を掴み粗末な湯飲みでそれをわたした。

「すいません。すいません。僕、田舎者で都会の事は何も知らないんです。」

「ふうん。」

高志は、なんとなく配達人の偉そうな態度に苛立ちを感じながらも、箱のことが怖くて他には頼れる人がいないのを一生懸命に顔で表現してみせた。

配達人は、「いっぽうどー」のお茶はやっぱおいしいなあ、と呟きながらずずつと茶をすすった。

「兄ちゃん大学生やんな。」

「はい、丁大の二回生です。」

「あそ。じゃあ、その賢い頭に叩き込んだとき。この国で唯一許されている『人を傷つける』方法をな。」

「人を傷つける・・・。」

「そう、この国は知つての通りストレスで溢れかえってる。仕事、対人関係、男女関係、金の問題、隣のオバハンが飼ってるアホ犬がめっちゃ吼えてきてイライラするとか・・・あ、ゴメン俺の話になつてたわ。まあ、その他いろいろな。今の若者はストレスを抱え込んでしまふんか知らんけど、毎日あきれくらゐ誰かが自殺してるんは新聞とかで読んだことあるやろ。」

「あなただって、その若者じゃないですか。」

「え。そう、ありがとう。アンタええ子やなあ。」

「えへへ。」

「まあ、政府も始めはただエライ事やなあってテレビで言ってるだけやってんけどな。年間三万人以上の自殺者がこの十年の間に出るようになった。割り算してみ、一日八十人ってことやん。自殺だけやない、うつ病みたいな心の病を抱える人間も増えた。個人個人の問題じゃなくてな、国家を動かすくらいの問題になってもーたんや。議員さんもニュースでぺらぺら喋ってるだけじゃどうにもならんからな、『しゃーない、ほっといたら国民がやいやい言い出すし困ったなあ。あ、そうや、ストレスのはけ口を作ったらどないやる』ってことで、ある機関を作った。」

配達人は、ごそごそとポケットから名刺を取り出した。

「黒箱配達人の黒崎と申します。どうぞ御用があればお電話ください。」

高志は名刺を受け取った。名刺には『黒箱配達局』の下に『配達人 黒崎恵吾』とだけ記されてある。

「あの黒崎さん。」

「ん？」

「そのままの名前なんですな。会社名。」

「国の機関なんやから、捻った名前よりもわかりやすい名前の方が覚えやすいやんか。それに俺に言われても、困るわ。」

高志は玄関に置いたままの、黒い箱を見つめた。見れば見るほど、気味が悪くなつていく気がした。

「気持ち悪い箱やろ。でもな、あれはただの黒く塗ってある段ボール箱やねんで。嫌いな人間、恨みを持つている相手、本音を言いたいけど言えないのがこの社会。俺たちはこの箱をそういう相手に送りつけるのが仕事やねん。この箱は、自分の住所も送り主の住所も書いてないから貰っても仕返し出来ないようになってる。貰った人間はただ、受け取るしかない。そういう箱や。」

「中身は。」

「中は何にも入ってない。さつき持ったとき軽かったやろ。入ってるとしたら、箱を送った人間の気持ちくらいかなあ。」

「僕、誰かに嫌われてるんですね。」

「兄ちゃん元気だしや。」

「でも、すぐには立ち直れないです。こんなの、気分が悪い。」

「深く考えない事やな、こんなん言ってもしやあないかもしれんけど、『黒箱』が出来てから自殺者はぐんと減った。精神科が流行らなくなつて病院を閉めだしたくらいや。もしかしたら、この箱を送った事によつてその人は死ぬのを止めたかしらんし。」

「勝手なこと言わないで下さいよ。貰うほうの気持ちはどうなるんです。こんな事するくらいなら、僕に直接文句言いに来ればいいじゃないか。」

配達人は高志の肩を軽く叩いた。

「それが人間つてもんやんか。」

高志は、腹が立つてきた。と同時に怖くなつてきた。今まで誰かに嫌われたり憎まれた覚えは一度も無い。だけど、自分がそう思っているだけで、本当は違ふかったのかも知れない。いつもニコニコ笑っている大学の友人が、心の中ではどんな思いをもつて自分と話しているのか、考えただけで恐ろしくなつてきた。いや、もしかしたらバイト仲間かも知れない。まさか家族……

「僕は、今まで人に嫌われないように、生きてきたつて自身があったのに。」

配達人は、「ごちそーさん」というと、高志に手を振つて「ほな」と言つた。

「帰っちゃうんですか。」

今にも泣き出しそうな高志をよそに、配達人はニコニコと笑っている。

「良かったやないですか。全ての人に好かれる人間なんてありません。箱をもらった事無いってことは、ちよつとオタクの人生薄っ

ぺらやったんかもしれないですよ。」

ドアノブを回す音の前に、配達人は小さくゲップした。

「では、いつでも、ご連絡お待ちしております。」

黒箱立会人

暗闇の林の中を抜けると、いつもそこには和樹が立っている。

私は持っていた鞆の中から、果物ナイフを取り出して彼に突き刺す。

腹 胸 首 腹 腹 腹

気づいた頃には私は真っ赤に染まって

「うわわわわ。」

同じ夢をもう一週間は見続けている。

額の汗を拭ってカーテンを開けた。

いつもと同じ朝の光が、顔を照らして熱くなる。

「私、意外と諦めの悪い女だったんだあ。」

溜息と共に、涙がこぼれた。

一ヶ月前、突然『別れよう』と和樹に切り出されたときは、

「そう、わかった。元気でね。」

と、淡々と言葉が出たと言うのに。

のそのそとベットから降りて、洗面台で、赤くなった瞼に水をあてる。

ふと目じりに皺が出来ている事に今気づいた。

わかってる、もう三十を越えている。

和樹と結婚できると思ってたのに。

また、目頭が熱くなる。

「もう、いい加減にしてよ。こんな顔じゃ、仕事にいけないじゃない。」

「ばしゃばしゃと顔を洗う。」

「うつつうつ。」

だめだ、今日は会社にいけない。

明美があんな事を言うからだ。

「和樹君、女の人と一緒に住んでみたいよ。」

想像するだけで、怒りと憎しみとが波のように押し寄せては、哀しみになってかえってくる繰り返しだった。

「・・・死にたい。」

和樹が他の女というなんて、まさか浮気してるなんて思いもしていなかった。別れを切り出されたのも、私が仕事で忙しくて会えない日が続いてたからだと思っていた。でもそうじゃなかった、和樹は私以外に好きな人が出来たんだ。

「私が、悪かったのかな。」

とりあえず、会社に電話しよう。今まで有休もほとんどとらなかったんだし、一日くらい大丈夫だろう。それに、今会社に行っても多分何も出来ない、泣き喚くだけだろうな。

会社に休みを伝えると、再び布団のなかに潜った。

どれくらい経っただろう、インターホンの音が聞こえる。

明美が心配して来てくれたのだ。

「ちよっと、大丈夫？彼氏にふられたくらいで休みとらないでよ。私にしわ寄せが来るんだからあ。」

「ゴメンね。」

明美は、会社の同期で同じ独身仲間だ。明美は私の悩みを、いつも冗談半分に優しく聞いてくれる。彼女のおかげで今までやってこれたと言っても嘘じゃない、それくらい明美に私は頼ってしまっ

いる。

「いいよ、私たち友達じゃない。」

彼女が笑うときは、口が漢字の一字に伸びて、一緒に口元のほくろが横に動く。それがなんとも色っぽくて、羨ましいなあと思ったことが、何度もあった。

「ありがとう。」

腫らした瞼にあてるようにと、明美が蒸しタオルを用意してくれていた。鼻をかんでそれを受け取ると、また涙が出てきた。

「うそ、また泣くの。」

「好きで出るんじゃないのよ。涙腺が緩んじやって。」

「レンタル店で、フランダースの犬でも借りてこようか？」

「やめて、部屋が水没するから。」

こんなときも、明美は「女々しい女ね。」なんて馬鹿にしたりしない。

彼女は優しく、母親のように抱きしめてくれた。

「困ったわね。」

明美の細い眉が真ん中に寄った。

「だって、原因は和樹君なんですよ。」

「・・・他に何も無いもの。」

「あなたたち、学生時代から付き合ってたんでしょ。だから、十年ちよつとか。早く結婚すればよかったのよお。和樹君はずっと望んでいたのに、あんたが仕事したいからってゴネて先延ばしにしてたんじゃない。」

「でも、いつかするって思ってたのよ。ううん、まだ好きだし、私は。」

「困った子ね。」

まるで、駄々をこねた子供を叱っているようだ。

「私だって、今更だってわかってる。諦めが悪いってのもわかってるし、自分でも恥ずかしいと思ってる。可笑しいでしょ、明美。笑いたかったら笑っても良いのよ。でも、頭がおかしくなりそうな

の、それくらい・・・つらいの。」

「わかった、わかったから。涙とか、鼻水とか拭いて。」

私は、明美にあの悪夢の事を話した。いつか本当に和樹の家に押し入って一緒に住んでいるらしい女共々、殺してしまうんじゃないか。

「あんたは、もつと和樹君の前で泣いたり喚いたりして抵抗すればよかったのよ。知らない？そんな歌流行ってたよね。大人ぶっちゃっるけど本当はすごい我慢してて・・・馬鹿じゃない。だから夢に出てくるのよ。」

たしかに、そうかもしれないと思った。

いつ頃からだろう。誰にも本当の気持ちを言わなくなったのは。いや、言えなくなったが正しいかもしれない。

年齢とか、女だからとか、変なプライドで本当の事を言うのが怖くなったのだ。

だから、和樹に本当の気持ちを言えなかったんだ。

「ああ。」

「溜息尽きたいのは私のほうよ。」

明美はいつの間にか、そばにおいてあった柿ピーをつまんでいる。

「そうだ、和樹君に黒箱を送るっているのはどう。」

「え、そんなの・・・私だってばれちゃうよ。」

「いいのよ、ばれたって。怒って電話でもしてきたらこっちのもんよ。あんたが言いたい事を言うきっかけにでもすればいいのよ。」

一発殴って見なさいよ。きつと見た事無い顔するわよ。」

意地悪そうに笑う明美の顔は、やっぱり魅力的だった。

この友人を敵にだけは回したくないと思った。けど、送ってみてもいいかもしれない。

「じゃあ、電話しといて。私、箱を買ってくるから。」

気が早いなあと苦笑しながら、黒箱配達局に電話をかける。

その時にはもう、涙は止まっていた。

「こんにちはあ。黒箱配達人です。」

ドアを開けたのは、女だった。

「えっと、倉谷和樹さんのご自宅で、お間違いないですよね。」

「ちよつとまって。」

短く切りそろえられた髪が、軽くゆれた。

「ねえ和樹、来て。」

奥から、眼鏡をかけた男が出てきた。「みて」と女が黒箱を指差す。

「美奈子か。」

男が眉を寄せた。

「えらいこつちゃ、これが昼ドラでよく見る修羅場ってやつやな。」と、少しテンションがあがるのをこらえて、がんばって無表情をつくってみせた。

「倉谷和樹さん。こちらにサインをお願いします。」

「……。」

「和樹、サインしてって。」

女が男を突つついた。「う、うん。」と気弱そうにボールペンを受け取る。今にも泣き出しそうだ。

「別にいいのよ。」

男の手が止まった。子供のような顔をして女を見る。

「私は、別にいいって言ってるの。あなたが、彼女のところに戻っても怒ったりしないわ。」

「僕は。」

「だから、いって。全部なかった事にしてあげる。」

「あの、サイン。」が欲しいんですけどお。

「ゴメン。」

男はボールペンを女に渡して、走って階段を降りていった。

「倉谷さん、サイン……。」

「私がするわ。本人じゃなくてもいいでしょ、あなたが黙ってい

ればいいんだから。」

そう言いながら、すらすらと男の名前でサインをする。

「男って馬鹿よね、ほんと子供みたい。」

そんな事を言われて、どういう顔をすればいいのかわからなかった。

「これでいい？」

につこりと笑った口元のほくろが、とても魅力的だ。

「いいんですけど、あなたはこれでいいんですか。」

「え？ああ、いいのよ。」

ちよつと、かつこよく髪でも掻き揚げて男前をアピールしてみる。

「俺やったら、絶対あなたを選びますけどね。ま、お困りなら、

こちらにご連絡下さい。別に私的なお電話も全然かまいません、ほら、名刺の裏に携帯の番号あるんで、いつでも暇してますから。」

女は手に取った名刺を、ひょいっと空に向かって飛ばした。

「いらないわ。」

まるで、母親に怒られたような気分になって、早急にその場を立ち去ってしまった。

禁煙配達人

「パパ嫌い。」

まさか、この言葉を父親になって4年目にして聞くなんて思いもしなかった。もっと娘が年頃になってから、高校の制服を着てちよつと色気づいてからだと思っていたのに。高校どころか、まだ娘は幼稚園に通っている。この前なんか「パパのお嫁さんになるの」ってはいでいたのに、何でこうなったんだろう。

「たばこ、吸いてえ。」

ハンドルに頭をもたれかけさせて、唇で禁煙パイプをくねくねさせる。

「仕事しなきゃ。」

とにかく、この禁断症状をどうにかしなければいけない。仕事に集中すれば、イライラも忘れられるかもしれない。車を降りて、荷物のチェックをしよう、そうできると忘れられる。

禁煙パイプをポケットに入れて、トラックの後ろの扉を開けた。中には白い箱が十箱ほど積まれている。今日は、まだ少ないほうだが、これから年末にかけてどんどん増えていく。

「えっと、佐々木さんね。」

一番手前あった箱を手取る、箱に書かれている住所を確認してカッターで箱を開ける。白い箱は、届ける住所や送り人の情報が書かれているので受け渡しには必要はない。要るのは、この箱の中にある、『真つ黒な箱』だけなのだから。

「佐々木信彦さんに。お届け物です。」

古いアパートの、インターホンに話しかける。

「これ、壊れてんのか？」

ドアをノックしようとすると、大家さんらしい女性が向こうから声をかけてきた。

「兄ちゃん、佐々木さんに用があるんだったら無駄だよ。」

「お留守ですか？」

「ううん。佐々木さん、家にいるんだけど出てこないんだよ。私も困ってるんだけどね、家賃滞納しちゃってるしさあ。いや、払えないわけじゃないみたいなんだけどさ、なんか陰気臭い人だね。お兄ちゃん、合鍵を貸してあげるから、いつ家賃払ってくれるのか聞いてくれないかい。」

「はあ……。」

仕方なく、合鍵を受け取って再びインターホンを押してみる。当然、返事は無く「開けますよ」と一応断りを入れてドアを開けた。

真つ暗な部屋の中に、無数の箱が転がっていた。

「佐々木……さん？」

旅行から帰ってきた時のような独特の臭いが鼻に入って気持ちが悪い。

目が暗闇に慣れてきた頃、ボンヤリと人影のようなものを確認する事が出来た。

「佐々木信彦さん、ですね。お届け物です。」

やっとの事で、電気のスイッチを押した。すると、佐々木信彦であろう男が首にベルトを巻いて箱の上に立っていたのだ。

「あんた、何やってるんだっ。」

高校時代にアメフトをやっていて良かったと、今ほど思ったことはない。

男が抵抗する間もなく、取り押さえる事が出来た。

「どちらさんですかあ。」

空気のような、弱弱い声が聞こえた。

男は、佐々木信彦で間違いがないようだ。

「お届け物です、せめて受け取ってから死んでください。」

「こんなときに、またですか。」

「またつて。」

今更気づいたが、部屋においてある箱は、全て黒箱だった。これほどの量を見た事が無かったので、思わず「うわっ」と言ってしまった。

「配達人でも、この量には驚きましたか。」

「すいません。」

「いえ、いいんです。箱をためているのが悪かったんでしょう。もう、捨てるのも面倒くさくなって。」

少し生氣を取り戻したのか、さっきよりは声にハリが出てきた。

「始めは仕方ないなって思ってたんです。」

「どうして。」

「社員にリストラ宣告をしていました。勤めていた会社員の三割を、解雇しました。」

三割が一体、どれくらいなのかはわからないが、多分結構な人数なんだろうな、と思った。

「恐らく、箱を送ってきたのは解雇された人たちです。きっと次の仕事が見つからずに生活に困っているんでしょう。中には一家心中した会社員もいました。だから、私を恨むのも当然です。それだけの事をしたんだから。」

「でも、お仕事だったんでしょう。」

佐々木は、薄い笑いを浮かべた。いや、ただの溜息だったのかもしない。

「私には妻も子供もいます。私が仕事をしなかったら、二人とも暮らしていけない。だから、嫌嫌ながら社員の首を切りました。その結果が如何なんです。これです、この部屋が教えてくれるでしょう。皆に恨まれて会社になんか行けない、どんな顔をしていけばいいんです。会社を倒産から救った仕分け人ですか。無理だ、もう死なせてください。」

今度は、そばにあったビニール袋を頭にかぶせた佐々木を取り押さえた。

「じゃあ、せめてこの受取書にサインしてからにしてください。
受取人が死んじゃってサインもらえなかったら手続きが面倒くさい
んです。お願いしますよ。もう、止めませんから。」

これは、正直本心だった。誰が自殺しようが関係ない。こんな陰
気なところ、サインを貰えばすぐに立ち去りたい。あとは、大家さ
んが警察かなんかが処理してくれるだろう。目の前で死なれたら、
自分が警察に行つて事情を説明しなければいけない。

早く家に帰りたいのに、イライラする。

「わかりました。」

気の乗らない佐々木にサインさせる。よし、これで次の配達にい
ける。

「あの。」

「はい。」

佐々木が困つた顔をしている。

「もう、好きにしてもらつていいんですよ。」

「違うんです。この箱。」

自分が持つてきた黒箱を、揺すっている。

カタカタ

音が鳴った。

「何か入つてるんです。」

「そんなはずは。」

無いはずだ。黒箱に、物を入れてはいけない決まりになっている。
絶対に空で箱を閉めるように、配達人のチェックが入っているは
ずだ。

「何で……。」

「こういう場合つて、開けてもいいんですか。」

「いや、こういつたケースは初めてで、どうしたら良いか。」

「危ないものではなさそうですけど。」

「佐々木さん。そんなの、わからないですよ。」

「怖いんですか？」

佐々木は笑っていた。

「僕には妻も娘もいるんです。」

「ああ、私と同じですね。」

そういいながら、黒いガムテープをはがしてしまった。

「ちよつと・・・」

中には、小さな指輪が入っていた。

小さすぎるわりに安っぽい作りが、大人のものでは無いとすぐにわかった。

「美樹。」

箱に向かって佐々木が呟いた。

「娘さん、ですか。」

「多分。」

優しく指輪を摘み取った。

「ああ、そうか。ママに買ってもらったんだな。」

佐々木の目からボロボロ涙がこぼれた。

「娘が、『パパと結婚したいから結婚指輪を買って欲しい』って、でも、これってお菓子のおまけについてるんですよ。だから、気安く買ってあげるって言っちゃったんですよ。ふふ、私が買わなかったから妻に買ってもらったみたいです。その指輪を送りつけて来るなんて、どういふつもりなんだろう。」

「それは。」

自分にはわからない。

けど。

「死んじゃあ、娘さんが本当に結婚するとき、そばにいられないですよ。」

「ああ。」

佐々木は大事そうに指輪を握り締めながら、床に崩れ落ちた。

サインは貰ったので、部屋を立ち去る。

「すまんね、兄ちゃん。」

ドアの前で大家さんが入れ歯を光らせた。

誰だ、箱を受け取った配達人は。

面倒臭いことを。

トラックに戻って、受け取り担当者を確認する。

「まったく面倒くせえことすんなよな。」

運転席に座って、ポケットから煙草を取り出す。

いつか必ずクビにさせるぞ、この黒崎とか言う男。

口から吐き出す煙が景色を遮断する。

視界が真っ白になってゆく。

全く面倒臭い。

配達人控室

どこかかと、廊下を歩く音がする。

「チツ」と、舌打ちが聞こえた。灰皿に煙草を押し付け、足早に部屋を出ようとする黒崎を止めたのは、彼より三年先輩の長沼という男だった。

「おい。今、明らかに俺を避けようとしたよな。」

「えー。そんなわけ無いじゃないですかぁ・・・先輩。」

長沼は、携帯をいじりながら写真画像を黒崎に見せた。

「な、見るよ。昨日の運動会。」

「わー。めっちゃかわいいー。ほんま、かわいいーわ。先輩のお子さ
んって・・・。」

「・・・だろ。」

どんだけ親バカなんや、このオッサンは。と言いたいのを我慢して、黒崎は笑顔を取り繕った。もう、何回見せられただろう。愛娘の写真、この前は動画も見たなあ。とイライラしてきたので、新しい煙草を取り出した。

「それで、未だに結婚相手はお父さんなんですか。」

「当たり前だろ。一生言わせてやる。」

「そら、無理です。」

「なんやてえ。」

「ちよつと！」

黒崎が、長沼を睨んだ。

「下手な関西弁は使わんとして下さい。」

関西人はなんでこうも、方言に敵しいんだろうと長沼は思った。後輩のくせに鼻をフンツと鳴らして怒る、アイツ本気で怒ってる。

「それはそうと、今年もきましたねえ。」

「うん。早く終わらせたいもんだ。」

「俺は、別に、家帰っても待つてる女はいないんで。ええですけ

ど。」

「お前、また別れたのか。まあ、俺には関係ないから・・・どうでも良いけど・・・なあ。」

黒崎の吐いた白い煙が、蜘蛛の糸のみたいに部屋に張り巡らされるのを、愛しい者でも見る目つきで長沼は追った。白煙を出した張本人は、次の獲物を待っているかの様だ。

「それで、年末には何箱くらいになりそうなんです。」

「聞いた話によると、三千万個らしいな。」

「げえっ。」

「ま、毎年こんな物だな。年間の四割は師走だから。」

「だからって、思い出したように黒箱を送るのは止めてほしいですわ。一年間たまったストレスを紅白歌合戦見ながら、もしくは行く年来る年・・・あ、もちろん俺は笑ってはいけないを見ますけどね。みんな年越すときはスッキリしたいんかなあ。」

「心の大掃除だな。」

ふんつと鼻息が聞こえたので、黒崎がニヤリと笑う。

「先輩、今ちよつと自分で言ってみて、臭い台詞言ってもーたなっと思っただでしょ。」

長沼が、ごしごし鼻を擦った。

「俺には、理解できないけどな。年賀状を送ってる相手に黒箱をしたためてたりするんだろ。」

皮肉っぽく、悪意のある言い方に、黒崎は目を見開いた。

「うっそお。」

その声は黒崎の物ではなく、色で言うならピンク色の女の子の声だった。

「先輩は、結構純粹なんですねえ。見た目はトラックの運ちゃんみたいですけどお。」

「うるせえ。じゃあ、お前はそれをやってるって事だな、タマ。タマと呼ばれたのは、長谷川珠子という黒崎の同期だ。」

「私はやってませんよお。黒崎君が送ってたんですー。」

「は、どついたるか。」

「いやー。」

「せやから、下手な関西弁は・・・。」

ころころ声を鳴らしながら、珠子が逃げてゆく。

長沼が苦笑した。

「もつと仲良くしろよ。」

「これが精一杯です。」

煙をはらいながら、長沼が立ち上がる。

「じゃあ、お先に。」

「おつかれさまです。」

一人になった喫煙室で、黒崎はメールを打つ。電話帳の中で、先頭にリンゴの絵文字をつけている名前が彼の寂しさを埋める相手だ。一人の名前を選んだ後、数分間はその細長い指を携帯で遊ばせた。

ぱちんと音が鳴ると。ゆっくりと立ち上がって、伸びをする。

「先輩に送ったなんて言われへんしなあ。」

ぼりぼり頭を掻きながら、廊下を歩く。黒い影が床に伸びて、伴侶のようにびったりと足に引っ付いている。

「だって去年いっぱい怒られてんもん。」

そう呟いた声は、まるで拗ねた子供のようだった。

黒箱差出人

「こんにちは、黒箱配達局です。」

ドアを開けると、子リスのような若い女性が立っていた。

「山崎直人さんですね。お電話ありがとうございます。」

まつ黒の作業服の旨ポケットには『黒箱配達局 長谷川珠子』と刺繍されている。ズボンにはジャージみたいなピンクのラインが入っていて、目がチカチカした。

「ど、ど、どうぞ。汚い部屋ですけど。」

「お邪魔しますね。」

まつ黒なスニーカーを脱ぐと、靴下までもが黒で統一してあるのに驚いた。こんなところまで税金が使われているんだなあと思うと、少し国に腹が立ったが、女性を部屋に入れるのは久しぶりだったので、あわてて雑誌や食器やらを片付けるのに必死になった。

「かまいませんよあ、仕事が終わればすぐに退きますので。」

「す、すみません。」

ぼりぼりと頭をかいて、押入れからまつ黒な箱を取り出す。飲みかけのコーヒーや消しゴムのカスが散らばっているのを手で払いながらテーブルに置いた。

「これで、いいんですね。」

「はい。」

子リスのような配達員がウエストポーチから一枚の紙を差し出した。

「では、こちらの配達伝票に山崎様のお名前と住所と電話番号、お送り先の方の名前と住所をご記入ください。」

「わ、わかりました。」

ボールペンの字が、どんどん汚くなっていく。いつものように細くて小さい字が、荒れて枠をはみ出すくらいの大きい字になっていく。

当たり前だ。
送る相手は、憎い相手なんだから。

林 高志

俺の幼馴染だ。

「ご記入いただけましたかあ？」

「あつ。は、はい。」

慌ててボールペンを返す。

「では、箱に何も入っていないか、確認しますね。」

みかん箱より一回りくらい小さい箱、配達員が逆さを向けたリ手を突っ込んだりして箱が空なのをたしかめる。

「な、なんで、空じゃないと、いけないんですか。」

何も入れるつもりは無かったが、なんとなく聞いてみた。

「そうですね。ごくたまにですけど、困ったお客さんがいて、危険物を入れようとされる方がおられるですよ。超小型爆弾とかじゃないですけど、リアルに剃刀とか・・・。」

配達人がさらっと言った。

「こ、怖いですね。」

「まあ、それだけ恨みも深いわけであ、だから黒箱をご利用されるわけですから。」

「なるほど。」

「あ、どうぞ、封して下さい。」

配達員が真っ黒なガムテープを出した。どこまで黒で徹底してるんだろう。

綺麗にガムテープが貼れなくて手こずっていると、配達人が箱を支えてくれた。

「あ、ありがとうございます。」

「もしかして、山崎さんはあ黒箱を初めて送られるんですか。」

「え、ええ。」

馬鹿にされてるのかなあと、少し嫌な気分になった。

「黒箱って結構利用されてるんですか。」

「年間、国民の四十パーセントが利用しています。」

おーくせんまん

おーくせんまん

頭の中で歌が回った。

って、ことは。

「大体、九千五百万人くらいですねえ。」

多いな。

黒箱のシステムが始まったとき、国民は怒り狂ったはずだった。

『年一回、嫌いな相手に、まっ黒な箱を送りつけることが出来る』
なんて。

非道德的だ。

新しい犯罪だ。

国民のストレスを軽減する方法だと？

自殺者を減らすどころか、増えるに決まってる。

だが、

だが、そんな箱を送るって言うんだ。

結果がこれだ。

人間は汚い生き物だと証明する結果になった。

そして、自分も今、黒箱を送ろうとしている。

「ぼ、僕は、悪い事をしてるんでしょか。」

配達人は、一瞬複雑な顔をしたが、笑顔を取り戻して。

「国では、認められています。」と、だけ言った。

国で認められていればいいんだろうか。送られた相手が嫌な顔をするのをわかっているのに、それでも法律で許されるからと自分を肯定しようとしている。複雑な気分だった。さっきまであんなに高志のことが憎くてしょうが無かったのに、とても申し訳ない気持ちになっっている。

「本当は、すごくいい奴なんです。」

「いい人なのに、黒箱を送られるんですか。」

高志と僕は、幼稚園の時から一緒だった。二人とも星が大好きですぐに仲良くなった。よく夜中まで起きて望遠鏡を覗きあって、いつか自分たちの名前を星につけてみたいねと笑った。同じ夢を持って、いつか同じ大学に入ろうとまで約束していた。高志は約束を守ったが、自分はまだ大学にすら入れていない二浪だった。高志は年に一回東京から帰ってきて一緒に星を見に行く。

それがとても辛かった。

大学の話を聞いていると胸が痛くなった。

本当は自分もそこにいて一緒に笑っているはずだったのに。

自分が悪いのはわかってる。

だけど、どんどん嫉妬が強くなっていく。

高志が『待つてるよ』と笑った。

大学入試を諦めたのは今年の夏だった。

「・・・来月、彼と会う約束をしてるんです。」

「そうですか。」

配達人は箱を抱えると、お辞儀をしてドアから出て行く。

「では、必ずお届けいたしますので。」

配達人はにつこりと笑っている。

愚かな人間を笑っているのだろうか。

多分僕は、高志の前で笑顔でいられる。

満点の星空の下。

高志に送られてきた黒箱の話を聞きながら。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3571p/>

黒箱配達人

2010年12月21日22時23分発行